

「音と身体の記譜」研究

平成29年度 活動報告

馬淵卯三郎のマヤ音楽コレクションの分析-記譜と身体の見点から

馬淵卯三郎(1927-2014)は、高等学校社会科教諭を経て、大阪芸術大学で音楽構造、とくに旋法について研究を行った日本を代表する音楽学者の一人である。筆者は2012年に馬淵本人より、1971年から1976年までのメキシコ共和国とグアテマラ共和国におけるマヤ系民族の音楽調査に関する資料(オープンリール・テープ、カセットテープ、DAT、フィールドノート)を個人的に寄贈された。

こうした経緯から本年度の「音と身体の記譜」研究会(プロジェクト・リーダー:柿沼敏江・音楽学部教授)は、馬淵によるマヤ音楽調査の資料を起点として、その思想を追跡・考察することに焦点を当て、馬淵のオープンリール・テープなどをデジタル化し、フィールドノートや調査手記を検証した*。それらの成果は、CD付き冊子『Un Trabajo del Profesor Usaburo Mabuchi de 1967-グアテマラ高地チャフル・イシルの縦笛と両面太鼓』として刊行した。

冊子では、馬淵が1976年に行った、チャフルとよばれる集落に居住するマヤ系民族であるイシルの人びとの縦笛(スペイン語でpito)と両面太鼓(tambor)の録音と採譜について主に考察した。CDには1976年調査時のオープンリール・テープの収録楽曲から抜粋した6トラック分の縦笛と両面太鼓の音楽を収録している。本年度はこれらの音源を、採譜やフィールドノートと照合しながら、縦笛と両面太鼓の音の諸相について検討を行った。

また、馬淵の資料は、内戦中という危険を伴う時期に、排外的な場所であるチャフル集落の音楽を記録・分析しているという点からも貴重だと考えられる。縦笛と太鼓は、16世紀のスペイン人による侵略以前から使用されていた土着の楽器である。現在においても中米のマヤの人びとのあいだで汎用性の高い楽器であり、馬淵が1970年代に遭遇した縦笛と両面太鼓の音楽は、現在のグアテマラで使用される音楽との変容を認められない。馬淵資料により、40年のあいだその音楽が連綿と紡がれていることが明らかとなった。さらに、この音楽は16世紀以前からも存在していることが解明されているため、マヤの人びとの生活には不可避なものとして少なくとも4世紀以上にわたり継承され、今後も響き鳴らされていくことが想定される。

また、本研究会では、馬淵資料の分析から特に「記譜する行為」について、記譜が身体とは切り離すことができないことを見いだした。馬淵はイシルの縦笛と両面太鼓の音楽を、平均律の五線譜上に書き表すことに挑んでいる。元来楽譜をもたない音楽を記譜することで、それを音楽研究という俎上にのせようと馬淵が考えていたことが伺える。しかしながら、CDと照らし合わせて採譜をみると、イシルの縦笛の旋律を五線譜上に書き表すことに馬淵は相当難航していたことが伺える。

馬淵は1976年の調査分析において、イシルの音楽が従来の西洋音楽における音楽様式の規律に当てはまらないことを指摘し、音の響きが人間の情動と密接に結束していることを示している。この観点からも、記譜という行為は、人間の身体性や情動との関係を等閑視できるものではなく、人間と音楽の媒体となると考えられる。今後は本研究を契機として、さらに「記譜と身体」について深究してゆきたい。

*デジタル化作業においては本学日本伝統音楽研究センターの器材を使用させて頂き、格別な配慮とご助力を頂いた。

(本研究は本学特別研究助成と芸術資源研究センターの予算の交付を受けて遂行したものである。ここに深く謝意を表す)

滝 奈々子(芸術資源研究センター非常勤研究員)